

会議概要（速報）

件名	令和3年度新潟市花育推進委員会（第1回）	
日時	令和3年8月20日（金）午後2時～午後4時	
場所	市役所ふるまち庁舎4階 401会議室	
出席者	委員	青山委員、阿部委員、片岡委員、北澤委員、坂井委員、玉木委員、 中野節子委員、中野優委員、村井委員
	事務局	【食と花の推進課】坂井課長、岸本課長補佐、佐藤係長、加藤主査、渡邊
概要	<p>1 開会あいさつ</p> <p>2 自己紹介</p> <p>3 会長・副会長の選任</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会長に中野優委員、副会長に玉木委員が選任された。 <p>4 議事</p> <p>（1）令和2年度 花育推進事業の取り組みについて【資料1-1～3】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料1-1～3に基づき、事務局が令和2年度の花育推進事業の取り組みについて説明を行った。 <p>（2）令和3年度 花育推進事業の取り組みについて【資料2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料2に基づき、事務局が令和3年度の花育推進事業の主な取り組みについて説明を行った。 <p>【主なご意見・質問等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・花育俳句について、花を文字で、心で表していくという素敵な取り組みだが、周知されていない。これまでの広報と、今後の伝え方について聞きたい。 →昨年度までは市報、ホームページ掲載のほか、市施設への募集チラシ設置、小・中学校への広報を行った。民間の懸賞サイトに掲載されたため、応募者の7～8割が県外居住者で、全国から応募があった。今年度は、8月30日から9月3日までFM KENTで放送されるほか、市民への広報を強化していく。 ・花育俳句について、ホームページ掲載の他に、応募句を利用したPR案はあるか。 →初回は応募された全句を食育・花育センターに掲示し、市民から投票してもらった。令和2年度からコロナ禍のためホームページ掲載となったが、優秀句について花育通信に掲載している。掲示など広く見てもらえる手段について考える。 <p>（3）新潟市第3次花育推進計画の策定に向けて【資料3】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料3に基づき、事務局が新潟市の現状や第3次花育推進計画策定のスケジュールなどについて説明を行った。 	

【主なご意見・質問等】

- ・「新潟市花育推進計画」の理念、施策方針に「花や緑」とあるが、「花と緑」の方が良いのではないか。
→「花と緑」の方向で考える。

5 事例研究

- ・新潟市花育マスターの中野節子委員が、花育事業の体験報告を行った。

6 意見交換

- ・花が「産業」や「新潟市」と結びつかないこともあり、興味がない大学生もいる。花が「力」を持っていると感じる体験を通して、花はいいものだと思ってほしい。優しい気持ちになれるなど花の効力に対する理解を、様々な行動につなげられるといい。
- ・多くの人に花の持つ力を体験してもらうために二つの手段が考えられる。一つは「新潟の花」のファンを作るための活動、もう一つは「新潟の花」の販売促進で、二つがうまく噛み合いながら前に進んでいくことが新潟らしい。
- ・コロナ禍であるが、花産業は小企業、少人数による組織での継続可能性が高いと感じている。後継者不足が課題となっているが、小さくてもやっていけるといふところに光を見た。
- ・花の流通では、1月の大雪の影響もあり北陸市場の売り上げが最も落ち、生産者も疲弊している。特に新潟では行事需要が多いチューリップ、ユリが売れず、生産1割減と打撃を受けている。過去には竹尾、大江山、北山などが新潟市の大産地であったが、高齢化や花価格の下落により、生産をやめたり、規模を縮小したりしている。生産の振興が望まれるが、若者から農業に携わってもらう手段が見つからない。
- ・浜松市の花を生産している女性たちは県外に自分たちをPRするなど元気だった。花好きは女性に多く、女性たちに新潟の花を理解して好きになり発信してほしい。そのために、花育マスターと新潟の花の現状と問題点について情報を共有し、講座でPRしてもらったり、花育マスターをはじめ、様々な人から意見を聴いて取り入れたりすることが大切だ。
- ・新潟が花の産地であることを知らない人がいることは課題であり、他にも改善点は多い。
- ・教育現場の目的の大前提は、未来の新潟を担う子どもたちが生きる力をつけていくことであり、その中で、いかにふるさとを思う気持ちを育てていくかということが、新潟の農業を支えることにつながるため、花育で新潟の良さを伝えていくことは大切である。学校としては、教育課程への位置付けとして、キャリア教育、生活科、PTA活動などに一つの手段として花育が入ってくることが自然である。
- ・保育園での目的は、自分が世話する花を決めて水をあげるなどの世話をして花が開いた時の達成感であり、そこへの手段が花育である。また、家庭をターゲットに考

えたとき、園や学校での体験により、子どもから家庭に花を育てる提案ができると、花の消費につながり、生活に身近なものになる。

- ・花産業がある恵まれた環境を生かして、幼少期に「新潟ならではの花育」を経験することで、ふるさと感覚を育むことになる。大人になり社会に出て精神的に折れそうになったときに、誇れるふるさとがあると思えることが大きな支えとなる。花育マスターの活躍により、多くの園に広まるといい。
- ・小学校でのクラブ活動で、祖母が家に花を飾っているから自分も飾りたいという男子がいた。身近に花があることで興味を持つ子どもが増えるといい。花を持ち帰って飾るだけでなく、管理のしかたも教え、母親や家族に教えてと伝えると、家族の会話が増えたり、家族が興味を持つことにつながったりする。
- ・自校への花育の取り入れ方は学校や先生により異なり、花育活動の停滞を招かないために地域教育コーディネーターが果たす役割がある。
- ・生産者の後継者不足は課題であり、花の販売価格が安すぎることも要因ではないか。花育推進計画は10年後の未来についても考えるもので、花を愛する教育や、様々な観点から方向性を考えていくといい。
- ・新潟市のフラワーデザイナーは30代、20代の人が少ない。花が好きで専門学校に学びにくる学生の気持ちを大事に育て、空白の世代をつなげるとともに、彼らに次の世代を育ててほしい。花育の様々な活動が途切れずにつながり、花について学んでプロになり、また学びながら、他の人に広げ、網目のように広がっていくために、花育の関係者同士もつながりたい。
- ・花育により、新潟の緑豊かな農業が産業として確立し、強い未来となっていくことを目指し、人材を育成して次につなげていくことが必要だと思う。そのために、多様な主体による花育活動と、花育マスターによる活動があり、それぞれが自信を持って活動し、隣と手をつなぐことにより、点と点がつながり、波及して大きくなっていくことが「新潟らしい花育」ではないか。

7 その他

8 閉会

傍 聴	0人
報 道	なし